中学校の国語教育
ー小説「走れメロス」「富嶽百景」の授業ー

国語科　金　本　宣　保

太宰治の小説「走れメロス」を教材として授業をした。ここでは、「走れメロス」のほかに「富嶽百景」、および、他の小説を読む学習を計画し実施した。

「走れメロス」の授業では、場面の状況や場面での人物の行為を読みとらせた。「富嶽百景」の授業では、場面の描写に注目して読みとらせた。表現・書き方に注目して読解を深める授業を進め、評価問題も、表現について問った。発展の学習として、文庫で「走れメロス」、「富嶽百景」以外の太宰治の小説を、各自で味わう学習をさせた。

学習では、生徒が自分で読み味わう活動を中心とし、まとめとして作文を書かせた。

学習者は文章を味わう一つの方法を学ぶことができた。

はじめに

太宰治の小説「走れメロス」は、魯迅の「故郷」とともに中学校のすべての国語の教科書にとりあげられている。しかし、「走れメロス」は、授業しやすい教材ではない。「走れメロス」と他の太宰治の作品とを、一体のものとしてとらえにくいために、教材の読みを深める方向が決めにくい。太宰治の他の作品を授業でとりあげる必要はないが、指導者のなかで「走れメロス」と他の太宰治の作品とを、同一ではないが一体のものとしてとらえる視点は必要である。

1　太宰治「走れメロス」の授業

教科書は、東京書籍「新編　新しい国語　2」である。2年の全クラスA・B・C組全生徒に授業をしたが、以下は、2年C組男子20名女子20名の授業の記録である。

（1）授業の展開

①全文を通読し、いい場面を挙げる。　1時間
（生徒が挙げた場面について、生徒に解説させ、指導者が説明を加える形で授業を進めた。）
②メロスの人物像、王の人物像を読みとる。　2時間
③メロスと王との約束をつかむ。　1時間
④メロスの村の一日を読みとる。　2時間
（村とシラクス）
⑤メロスの走る場面を読みとる。　2時間
⑥結びの場面を読みとる。　2時間

（2）走るメロス

「⑤メロスの走る場面を読みとる。」の要点を、定期テストの問題文で示す。

問題文　メロスが途中で倒れた場面について

「気の毒だが正義のためだ！」と猛然一撃、たちまち三人を殴り倒し、（略）

わたしは、なんだか、もっと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。ついてこい！フィロストラトス。」

問

問1　傍線①「おまえは希代の不信の人間、まさしく王の思うつぼだぞ、と自分をしかってみるのだが、」について

1　「と自分をしかってみるのだが、」の、「と」は、どの文から「まさしく王の思うつぼだぞ、」までを受けているか。（メロスが自分をしかっている言葉はどこからか。）受けている文のはじめの五字を書き抜いて示せ。
2　同じようにメロスが自分に呼びかけている文が二段、四段に一つずつある。それぞれの文のはじめの五字を書き抜。

問2　傍線②「ああ、何もかもばかばかしい。わたしは、醜い裏切り者だ。どうとも、勝手にするがよい。やんぬるかな。」について

1　同じような内容を表している言葉を一段から二つ、そのはじめの各五字（それぞれ文のはじめ）を書き抜いて示せ。

2　そういう言葉をいうことによってどうなっていっているか。説明せよ。

問3　傍線③「何か小さくささやきながら、」とあるが、ささやいている内容を想像して会話文の形で書け。

問4　傍線④「肉体の疲労回復とともに、わずかながら希望が生まれた。」とあるが、この文と対応している文が、一段にある。その文のはじめの五字を書き抜け。

（3）小説の外部

授業計画において「近代文学作品論集成⑧　太宰治『走れメロス』作品論集」（クレス出版　２００１年４月２５日発行）を参考にした。

その中の松本武夫「太宰治『走れメロス』に於ける“道”」の図をヒントにして、授業の展開「④メロスの村の一日を読みとる。」で、次のような図式で説明した。

村	←―→	シラクス・都市
メロス	←―→	ディオニス
素朴	←―→	理屈

古代のシチリア、さらに、ギリシアについての話をし、この物語の舞台を説明した。登場人物はその土地の上で生きている。

テストの問題で「問３　傍線③『何か小さくささやきながら、』とあるが、ささやいている内容を想像して会話文の形で書け。」と問っているが、答は「起きなさい、メロス。」、「走りなさい、メロス」、「がんばりなさい、メロス」等でいい。それが、メロス自身から生まれた「ささやき」ではなく、「すぐ足下で、水が流れているらしい。」その水の声であることに注目させたかった。それは小説の中では「ゼウス」の力と言ってもいいが、「ゼウス」では物語として読者にリアリティを感じさせられないであろう。しかし、この部分は、ゼウスを知らないものにもリアリティがある。それを支えるものは、小説の外部にある。

指導者は、物語の流れを支える外部として、次の図式を考えていた。

メロス	「村」の人
倒れたとき	「水」の「ささやき」
結び	「なんだか、もっと恐ろしく大きいもの」

（4）結びの場面の授業

［1］作文を書く

授業の展開「⑥結びの場面について」では、その場面の登場人物のだれかの立場になって、思いを書かせた。

生徒が選んだ人物

メロス	５名
セリヌンティウス	１６名
王　ディオニス	１３名
フィロストラトス	２名
刑吏	１名
群衆	３名

文例Ａ　メロス

「『まだ時間はある。この調子なら間に合うぞ。』

『後もう少しだ。刑場までほんの少しだ。セリヌンティウスよ。もう少し待ってくれればいいんだ。私は悪夢を見たが、ちゃんとこうして君のために走っているのだ。セリヌンティウスよ、私は約束を守るぞ。私は絶対に君を死なせはしないぞ。』

『無二の親友よ。君と出会ったことを誇りに思うぞ、セリヌンティウスよ。さあ刑場についた。私は王、暴君ディオニスに打ちかったぞ。』」

文例Ｂ　セリヌンティウス

「メロスが戻ってきてくれた。やはり、約束を守ってくれたのだ。君はわたしのために精いっぱい刑場まできてくれた。わたしは君のような友人をもててとても良かったと思う。一度、君を疑ってしまったことが悔しい。しかし、君を信じていて良かった。君が帰ってきてくれたことを嬉しく思う。」

文例Ｃ　セリヌンティウス

「はりつけの柱に縄打たれた時、セリヌンティウスはメロスと初めて出会った時のことを思い出していた。

――あれは、初夏のことだった。夕立にみまわれたぼくは、急いで店先に行き、雨宿りをしようとした。そこにメロスがいた。思い切って話しかけた。メロスは雨がやむまで、楽しい話をしてくれた。それから、ぼくらは、仲良くなり、いつも一緒に遊んだ。一回、ぼくが、がけから落ちた時、メロスが助けてくれた。その時、二人のなかは強いものになった。

ぼくは、長い間、メロスに会っていない。しかし、助けてもらったことをわすれたことは一度もない。だから、信用した。」

文例D　ディオニス

「私はメロスとセリヌンティウスの会話を聞いて感動した。生まれてはじめて信実や愛、正義というものに感動した。自分の中の何かがくずれ落ちたようだった。真実の平和を願う気持ちはこういうものだったのだ。今まで、私は人を疑うことしか考えていなかったのだ。私は今まで平和を願いつづけてきたと思っていた。だれもが私と同じ考えで、だれもが私にさからわないのが平和なのだと信じつづけてきた。しかし、それはまちがっていたのだ。お互いを信じ、疑わないのが真の友でそこから平和が生まれるのだ。

メロスは、私に教えてくれた。ありがとう、メロス。」

文例E　フィロストラトス

(前半略)

「『ああ、ゼウス様、ありがとうございます。師とこの人の心は、日が沈みかけた今でもつながっている。それならメロス、走るがいい。自分の心と友を信じて。これは危険なかけになるが、間に合わぬこともない。さあ、走れメロス。私はあなたについて行こう。もう何もおそれるものはない。』(略)

私はメロス様から少し遅れてついた時、すでに日は沈んでいた。そして、二人は抱き合っていた。群衆のどよめきで、二人の会話はきこえなかったが、なぜか涙がとめどなく、あふれてきた。」

文例F　群衆の１人になった気持ちで

「今まで、王様の身内やいろいろな人々が殺されてしまった。自分もふとした王の考えで殺されることもないとはいえない恐ろしい日々だった。今回も王の言う通りになってしまい、まだ多くの人々が殺されなければならないのかと思っていたが、メロスは王の考えを打ち破って、友との約束を守った。それによって王は考えをあらためたので、もとの平和が戻ってくると思う。もし、メロスが帰って来なかったら、私も王と同じく、人を信頼できなくなっていただろう。メロスが来てくれたおかげで、心の中の不安や恐怖が全部消え去った気がする。メロスに感謝の気持ちを伝えたいものだ。」

授業では、指導者が人物ごとにまとめ、全生徒が、各自の作文を朗読し発表した。

文例Bは、セリヌンティウスの気持ちを分かりやすくまとめている。文例Cは、書かれていない物語を作っている。文例Dは、王に対するメロスのはたらきをよく書いている。文例Eは、長い作文の一部だが、場面を追いながらこの物語を語りなおしている。文例Fは、世の中に対するメロスの力を、分かりやすく書いている。それぞれ面白く書けている。

この作文を書かせて、指導者に予想外であったのは、メロスを選んだ生徒が少なかったことである。それは、他の学級A組、B組でもそうだった。

結果から考えたことであるが、人物が思いを変えていく場合は書きやすいが、メロスの気持ちは素朴だから、書きにくい。文例Aは、単純に力強く書けているが、これ以外の書き方は難しい。

主人公メロスは素朴で単純である。それだけに、授業で、小説「走れメロス」の主題を正面からとりあげて進めるのは難しい。途中の「悪い夢」の叙述に、作者太宰治らしさが表れているにしても、それは、「走れメロス」の主題ではない。主題を追っていくことを学習活動の中心にはしないが、主題を理解させることは大切である。指導者は、メロスが言う「わたしは、なんだか、もっと恐ろしく大きいものために走っているのだ。」の「なんだか、もっと恐ろしく大きいもの」としか、書けないものを学習者に味わわせることを願った。少なくともそういうものがあることを、理解させたかった。

［２］指導者のまとめ

作文の発表の後で、指導者がまとめた。

その内容について、定期テストの問題で、次のようなまとめの文章を読ませた。

問題文　小説の結びの場面について

「まだ日は沈まぬ。最後の死力を尽くして、メロスは走った。(略)

勇者は、ひどく赤面した。」

問

次の文章は、「走れメロス」の結びについて解説したものである。空欄に適当な言葉を補い文章を完成せよ。「A」～「C」には、右の小説中の各十字以内の言葉「D」～「H」には小説中の各五字以内の言葉を書き抜くこと。【Z】には、まとめの言葉を考えて書くこと。

メロスとセリヌンティウスは信頼で結びついている。しかし、二人の結びつきに危機があった。メロスは、「A」。また、セリヌンティウスは「B」。刑場で、メロスとセリヌンティウスは互いに告白し、分かり合い、殴り合い、つながりを完全に取り戻す。その場面で「C」に二人の心が一つになったことがよく表れている。

二人の姿を見て王は、正義とか信じるとかいうことを「D」だと思っていたが、メロスが「E」を守って帰ったことで、考えを改めた。そして、同じ仲間に入る。

メロスとセリヌンティウスと王との周りには群衆がいる。群衆は、メロスが刑場に到着したときは何も気付いていない。メロスにとって「F」と同じであった。メロスが到着したのを見て、群衆は「G」と叫ぶ。メロスとセリヌンティウスの殴り合う姿を見て「H」する。最後には歓声をあげ、王を認める。群衆は、何もしていないが、群衆の心は大きく動いている。群衆を「歓声」に導いたのは、メロスであり彼を支えたセリヌンティウスである。小説の終わりではすべての人の気持ちが一つになった。つまり、メロスが【Z】

解答例

A　悪い夢を見た	B　君を疑った
C　二人同時に言い、	D　空虚な妄想
E　約束	F　濁流
G　許せ	H　きょき

Z　例　この世界に信実を成り立たせている。

2　「富嶽百景」の授業
表現を味わう。

集英社文庫「走れメロス・おしゃれ童子」を、学校でクラスの生徒数分準備し、生徒は授業ではそれを教材とした。表現を味わうことに注目して授業をした。

長部日出雄「桜桃とキリストーもう一つの太宰治伝ー」（文芸春秋社）についての「週刊朝日」２００２，６，２８の早瀬圭一の書評

「妻美智子が存在したから傑作が生まれた
丹念に、熱く冷静に見詰めた重厚な評伝」

を、「娘さん」との見合い婚約に至る場面の授業で、プリントして生徒に読ませた。長部日出雄の「太宰治伝」が、太宰治のを小説を、小説自体として味わわせる方向に向かわせるものであったから。また、この書評の文章を読むだけで「富嶽百景」が分かりやすくなるからである。

テストの問題では次のように表現について問った。

問題文

次の文章《Ⅰ》は、太宰治「富嶽百景」の前半の１節で、《Ⅱ》は、結びである。読んで、後の問に答えよ。

《Ⅰ》　御坂峠で、井伏氏は、仕事をしておられた。
（略）
いい富士を見た。霧の深いのを、残念にも思わなかった。

《Ⅱ》　十一月にはいると、もはや御坂の寒気、堪え難くなった。茶店では、ストーブを備えた。（略）
甲府の富士は、山々の後ろから、三分の一ほど顔を出している。酸漿（ホオズキ）に似ていた。」

問

問１　（略　漢字の読み）

問２　傍線①「昔から富士三景の一つにかぞえられているのだそうである。」②「これは、まるで、風呂屋のペンキ画だ。」とあるが、①「富士三景の一つ」②「風呂屋のペンキ画」それぞれの説明として適当なもを次の中から一つずつ選び記号で示せ。

（以下選択問題は正解の選択肢のみ示し、他は略）

①　ウ　数ある中で特に優れた風景。

②　ウ　あまりにも形にはまった風景。

問３　傍線③「私は、恥ずかしくてならなかった。」とあるが、ここでの「恥ずかしい」という言葉の使い方は、普通と違う。その特徴を「普通は ― に使うが、ここでは ― に使っている。」という形で説明せよ。

問４　《Ⅰ》の（二段）の場面を井伏の立場から書くとどうなるか。時間的な順番で１～４の箇条書きにして書け。（井伏を「自分」として書くこと。）

問５　傍線④「私は、へどもどした。」の「へどもどした」を言い換えた言葉（それぞれ十字以内）を傍線④の後から二つ書き抜け。

問６　傍線⑤「けれども、また思い直し ～ レンズをのぞいた。」の文について。

１　文表現の特徴として当たっているものを次の中から三つ選び記号で示せ。

ア　長い。

カ　話す調子で書かれていて、読んで分かりやすい

コ　事実と作者の気持ちとをからませて書いている。

２　文表現の特徴からみて、同じような一文が《Ⅰ》に

もある。その文のはじめの五字を書き抜け。

問7　傍線⑥「どうにも狙いがつけにくく、私は、二人の姿をレンズから追放して、ただ富士山だけを、レンズいっぱいに　キャッチして、富士山、さようなら、お世話になりました。パチリ。」について。

1　「私は、二人の姿をレンズから追放して、ただ富士山だけを、レンズいっぱいにキャッチして、」とあるが、ここでは、《Ⅰ》の（一段）（二段）の富士に対する見方と変わっている。《Ⅰ》の（一段）、（二段）、傍線⑥のそれぞれの富士の見方を簡明に説明せよ。

2　《Ⅰ》の（二段）の私と老婆との立場と《Ⅱ》の私と「娘さん二人」との立場はどうか。「富士」とのかかわりから考えて説明せよ。

3　「富士山、さようなら、お世話になりました。パチリ。」での作者の思いを想像して書け。

解答例

問3　（普通は）自分が劣っていることに対する気持ち（に使うが、）
（ここでは）相手が劣っていることで起きる気持ち（に使っている。）

問4　1　太宰君と三ツ峠に登った。
2　太宰君の服装は登山に向いてなかったが、自分は「気にしなくていい」と言った。
3　峠では霧が出て、なにも見えなかった。
4　茶店の老婆が写真を掲示して見せてくれた。

問5　狼狽した　わななきわななき

問6　2　茶店のドテ

問7　1　《Ⅰ》の（一段）富士を「軽蔑」している。
《Ⅰ》の（二段）富士そのものでなく老婆の見せる富士の写真が、いい（と言っている）。
⑥人がいなくて富士だけがいい（と思っている）。
2　《Ⅰ》の私と老婆　私はよそから来た人で、老婆は富士の麓に住む人
《Ⅱ》の私と娘さん　私は富士の麓にいる人で、娘さんはよそから来た人
3　例1　富士のおかげで気持ちも生活も新たにすることができました。
例2　富士の麓でいい人に会い、富士をみる目も変わりました。

3　文庫で太宰治の小説を読む授業

続いて、集英社文庫「走れメロス・おしゃれ童子」の『走れメロス』『富嶽百景』以外の作品を読んだ。

集英社文庫「走れメロス・おしゃれ童子」の目次

「葉桜と魔笛
新樹の言葉
おしゃれ童子
駆込み訴え
走れメロス
清貧譚
待つ
貧の意地
カチカチ山
語注　池内輝雄　　解説　池内輝雄
鑑賞　井坂洋子　　年譜　小田切進」

（1）授業の展開

①教室全体で読む。　2時間
「おしゃれ童子」
「清貧譚」
「待つ」
「貧の意地」（部分）
「カチカチ山」（部分）

②自分で読み、好きな作品を探す。　1時間

③自分で選んだ面白い部分について解説する文章を書く。　2時間
作文の課題
1　題　　選んだ小説
2　書き方　面白い表現の引用
面白さ、全体とのつながりなどを説明する。
「走れメロス」「富嶽百景」とくらべる。

④作文を発表する。　1時間
学級の全員が自分の作文を朗読して発表する。

（2）生徒が書いた作文

各小説を選んだ生徒の数

葉桜と魔笛	5
新樹の言葉	6
おしゃれ童子	2
駆込み訴え	3
清貧譚	4
待つ	3
貧の意地	5
カチカチ山	12

作文の例

文例G　「葉桜と魔笛」部分

「『妹から手紙を受け取る私の指先は、当惑するほど震えていました。』

（略　物語のまとめ）

この話は妹に対する姉の気遣づかいが良いと思った。一生懸命、男の筆跡を真似、妹を安心させようとしていたので、この人は妹を本当に大切に思っている優しいお姉さんだということが分かった。

『富岳百景』や『走れメロス』とは、また、違った感動のある話だ。すごく静かで、心のきれいな人物が出てくる話である。」

文例H　「新樹の言葉」

「『泣くやつがあるか。泣いているのは私だった。』

この文章が面白いのは、はじめは登場人物の言葉として、すこし感動するようなことが書いてあって、そのあとに『泣いているのは私だった。』とつけて、文章を重くなりすぎないように、落ちをつけている所だ。

この場面では、主人公が酔ってしまって、話しているうちに、やりきれなくなって乳母の子をはげましはじめた。感情的になった主人公と、乳母の子のきょうだいの様子が想像しやすく、はげましていたのに、自分が感動して泣いてしまう。

他の作品『走れメロス』も感動するようなところで、最後に落ちをつけている。落ちをつけることで、できる面白さが、太宰さんの作品のいい所だとおもいます。」

文例I　「駆け込み訴え」

「『あの人には一体、何ができましょう。なんにもできやしない。私から見れば青二才だ。』

小さいころから、イエスさまは、『すごい人』『いい人』とかいう固定した考えが頭にあった。実際イエスさまの物語には、イエスさまの視点で書いてあるもの、他の人から書いてあるもの多い。しかし、この文章は、イエスを裏切ったユダという人物の視点からイエスという人間をえがいている。ユダは、イエスをプラスにみる考えとはまったく正反対で、『青二才』とか『なんにもできやしない』『自惚れ屋』『傲慢』と、批判的な言葉をならべている。途中でプラスになるような事をを言ったが、やっぱり最後は批判的な事しか言わなかった。

この文章は、今まで頭にあった固定的な考えとまったく違い、新鮮でおもしろい。」

文例J　「貧の意地」

「この原田内助も、眉は太く眼はぎょろりとして、ただものではないような立派な顔をしていながら、いっこうに駄目なおとこで、」

このように、原田内助の間抜けな話が続く。私は、原田内助の言動と容貌のあまりにちがうところが面白いと思います。いつも、幼児のように、純すいにおどろき、世話をしないと生活もおぼつかない。でも、変な所で意地を張り、結局幸福を追い払ってしまう。この性格と容貌が、極端に違う所が面白いです。また、内助の女房もその様子を非難しながらもあたたかく見守る。この、二人の関係も面白いです。

太宰治さんの作品の面白さは、一文が長く続く所にあると思います。そこに太宰さん自身や、主人公の心情が、細かく説明されていて、感情移入がしやすく、面白い部分だと思います。」

文例K　「カチカチ山」

「『とにかく招かれざる客というものは、その訪問先の主人の、こんな憎悪感に気づくことははなはだ疎いものである。』

この文は、狸が兎の家に勝手に訪問したときの筆者の言葉です。私は最初、狸がばかだなあと思ったけれど、この文から、確かにこんな錯覚は気づかぬうちに自分も犯しているかもしれないと思いました。もし、訪問先の人が、兎のように『あら！』と言ったら自分はそこに行きたくて行っているのだから、きっと自分はいいように考え、憎悪感に満ちた『あら！』だとしても、驚きや感激に満ちた『あら！』だと錯覚してしまうかもしれません。

このような、筆者の解説がはいっている小説なので、狸はただのばかではなく、他の人もやってしまいそうなものだと感じることができてました。」

4　評価と課題

集英社文庫「走れメロス・おしゃれ童子」の作品を味わうことはできた。主題を読みとり考えることを中心にするのではなく、表現の面白さを味わうことを中心にした授業で「走れメロス」と他の太宰治の小説とを、共通な方法で読解することを学習者は学んだ。太宰治の「中期」の作品の読み方は学習できた。

しかし、この学習では、太宰治の「後期」の作品を味わうことは、できていない。そういうことまで、はじめから考えていた訳ではない。ところが、1学期に太宰治の小説の授業をした後、続いての夏休みの本を読み感想

文をや紹介文を書く課題で、太宰治の小説「人間失格」をとりあげた2名の生徒がいた。その感想文から、指導者は太宰治の「後期」の作品について考えた。

ひとつは次のようなものであった。

文例L

「こんな変な考え方をする人も珍しいのではないか。読み進む程そう思えた。

『人間失格』というと非道徳的だったり、動物的な人を思い浮かべる。しかし、葉蔵にいわせるとそれは違うらしい。つまり、人間の方がみにくいというのだ。

果たしてそれが正しいのかは分からない。ただ自分の思いと全く逆の意味で使われていて驚き考えさせられた。とにかく理解しづらかった。

(略)

葉蔵は太宰ともとれるので、太宰は『自分は世間のいうような異常者ではなく、実はいい人なんだ。』と少し甘えの入ったことをいいたかたのかもしれない。

後味の悪い小説だった。

結局は分からなかった。

人間はそうすてたものじゃないと自分は思いたい。」

「人間失格」を理解していない。授業で「人間失格」に共感することを求めるようなことをしないが、自分で選んだ小説なら理解してほしい。

一方ある生徒はこういう感想文を書いた。

文例M

「作者太宰治は、『人間失格』の完成の1ヶ月後、自らの命を絶つ。この作品の主人公の葉蔵の『死のう、自分は人間失格だ。』という言葉から推察すると、太宰治は、葉蔵に自分自身を重ね、自分の死を見つめるために『人間失格』を書いたのだと思う。そして、自分をいさぎよく死へと追い込んでいったのだが、なぜ、自殺という逃げた生き方を選ぶ必要があったのだろうか。」

これは書き出しだが、このように問えば、読みとることができる。この問への答えは、平凡であったが、それでも十分主題を読みとっていると言えるものであった。

なお、この生徒の作文で面白い部分があった。

「自分が他人にウソをまじえて話をしていると感じ、ついに、自分は他人にサービスする『道化』者だと、言いはじめる。しかし、私は、一体この世の中で誰が本心を言っているのかと考えてみた。他人に向かって百パーセントの本心を誠実にいうことがあろうか。いや、それ以前に、本心とはなんのことだろうか。自分自身、自分の本心のすべてを分かっているのだろうか。自分の心の底ははかりがたい。他人の心の底はさらにはかりがたい。本心を言って理解し合えるなどというのは、甘い幻想にすぎないのではないだろうか。」

これは、同じクラスを国語の授業している信木教官の授業で学習した、「『私』『自分』という『幻想』」というキーワードとする考え方を適応したものだと考えられる。

Lは「人間失格」を理解できず、Mは理解している。そして、普通の国語の教室では、Lを書いた生徒は学力が高く、Mを書いた生徒はそう学力は高くはない。また、LもMも、太宰治を絶対的なものと見ていない。

今回の「走れメロス」「富嶽百景」を中心とした授業での学習だけは、「人間失格」、および太宰治の「後期」の小説を読みとる方法は養われない。中学時代に太宰治の「後期」の小説を読みとるまでの授業をしなくてはならないとは、考えない。この学習は小説を読む一つの方法であって、小説を文章表現の面白さを味わうという視点から読むものである。

小説の世界は、広く深い。